

## 月例研究発表要旨

第 133 回 1988 年 5 月 25 日

「政治はいつの頃からいかがわしい  
行いと見られるようになったのか  
——policy という言葉の分析——」

塚田富治

現代の政治が余りに醜悪であるために、多くの人々はそこから受ける印象を過去の「政治」観の中に投影しがちになる。いわく、「政治」は太古の時代より「いかがわしいもの」と観られていた、と。しかし、筆者が辛じて守備範囲にできる西欧世界に限って言えば、「政治」という言葉 (*πολιτεία*, *politia*, *policy*) の分析は、「政治」が通例「近代」と呼ばれる時代までは、思慮や正義などの徳に基づく道徳的に賞賛されるべき行い、と見られていたことを明らかにする。現在では「政治」と密接不可分と考えられている暴力や権謀術数などは借制的支配との関連で論じられ、「政治」とはまったく無関係なものとして見られていたのである。

ここでは時代と地域を限定して、人々の「政治」に対する見方がどのように、変化したかを素描することにしよう。すでに「近代的」なものが定着し始めたシェイクスピアの時代のイングランドが話の舞台である。この時代、「政治」はアリストテレス以来の伝統的な政治論の根強い——とりわけギリシア・ローマ古典の普及以降——影響をうけて、その目的においても方法においても共に、道徳と密接不可分の関係をもつ、あるいはもつべき行いと見られていた。この時代の最大のイヴェントであった各種のペイジェントにおいて、

「政治」が華々しく登場したように、「政治」は依然として人々の大きな賞賛と期待の的だったのである。

しかし、この時代「政治」に対する見方や議論の中でのもっとも劇的な出来事は、「政治」が多くの人々から道徳的にいかがわしく危険なものとして見られ、嫌悪や批判の対象となり始めたことである。こうした見方が広く流通していたことは、「政治」が芝居小屋に集まる人々の前で語られる仕方からもっとも良く示される。マーロウやキッドによって「政治」は、野心家や陰謀家が権力を篡奪し、また謀略を実現するための手段、方法として描かれる。シェイクスピアもまた劇中人物に世相の退廃を「いまの世の中、慈悲心など起こしてはなるまい。良心は政治の足蹴にされるものでしかない」と嘆かせるのである。

戯曲だけではなく、「政治」を直接にテーマとして論じた作品においても、「政治」は人を殺し、毒を盛り、また欺くことなど謀略という意味で用いられる。『宗教と政治』*Religion and Policy* (1608) の著者はかれの時代の「政治に対する一般的な理解 the common understanding of Policy」を次のように述べる。「悪巧みにたけた人の狡猾な知恵が不法な目的を遂げるために謀りごとをめぐらすとき、あるいは法にかなった目的を不正で悪辣な手段で追求するとき、これが高い地位にある人々の企ての場合には、政治と呼ばれるのである」。われわれはこれが現在の日本の「政治」ではなく、およそ4世紀も前のイングランドの「政治」についての解説であることにある種の驚きと苦笑を禁じえないであろう。

さらに注目しなければならないのは、この

ように多くの人々から「いかがわしいもの」と見られる「政治」を、一部の人々が国家統治のために必要なものとして積極的に評価し始めたことである。現実政治の担い手でもあったビーコンは、統治者が国家のために用いる欺瞞を「私人の場合にはベテンの名で非難される」が、統治者の場合には「正当にも政治」と呼ばれる、と述べる。この外にもローリヤやベイコンの作品、またこの時代のイングランドで広く読まれたリブシウスの『政治学六巻』の中で、「政治」は道徳とは切り離して論じられ、道徳的に「いかがわしく」また危険と見られる手段や方法も「政治」の重要な構成要素として、公然と肯定的に論じられるようになるのである。

もちろん以上のことは、すべての人々の政治観が一大転換をとげたことを意味するものではない。シェイクスピアの時代、両極端に位置し合うような議論が現われるほどに、「政治」についての議論が多様化し、活性化したのである。それでは、なぜこのような現象が起こったのであろうか。報告のテーマに則して言えば、なぜ「政治」はいかがわしい行いと見られるようになったのか。この問いについては、いずれ機会をあらためて論じなければならぬだろう。

第 134 回 1988 年 6 月 29 日

### 「Bridges」

河村錠一郎

学際的な研究・批評の幾つかの具体的な例を引いて、いま「bridges が危い」という話をした。しかし、いいたいところは、「やはり bridges が面白い」ということだった。'bridges' は、ポピュラーとクラシックの「かけはし」という意味合いで音楽で使われている。

研究と評論の「かけはし」という意味合いも、私の話の場合、持たせられるだろう。

第 135 回 1988 年 11 月 16 日

### 「心的空間と言語現象」

三瓶裕文

1. 本報告の目的は、話者が、ある対象を、自分を中心とする心的空間のどこに位置づけるか、という心的空間を軸とするモデルが、いろいろな言語現象を統一的に説明する一般妥当性を備えていることを示すことであった。そして、その例証は、日本語と英語という、異なるタイプを代表する言語に求めた。そのために日本語の小説とその英訳本を対照するという方法をとった。ここでの枠組みを思いきり割り切った形で図式化すれば (1) のようになる。

(1)



2. 移動行為に関わる言語事象：くれる／あげる（やる）；行く／来る

#### 2.1. 授受動詞

授受行為は、英語では give 一語で表されるが、日本語では、授受行為の受け手が、話者に心理的に近い時、すなわち、話者空間の「内」の場合には、「くれる」が、「外」の場合には、「やる（あげる）」が用いられる。

#### 2.2. 「来る」(come)／「行く」(go)

授受動詞とおなじように、移動の方向が、自分の空間内か外かにより使い分けられる動詞に「行く」／「来る」がある。実例観察により、次の三点が示された。1. 物理的に話者が到達点にいなくとも、心理的に到達点を自分空間内と見なせば、「来る」(come) が用いられる。2. そのような「自分空間の拡大、視点の移動」による使用傾

向は come のほうが、「来る」より強い。

3. 心理的に到達点を自分空間として認識することから、「来る」(come) の場合、移動行為の到達をいわば「直接知覚」できるために、単なる移動行為に加えて、「到達」つまり行為の「達成」という含意が生じる。これはごく当たり前の観察だが、本報告で扱った他の言語事象の背後にも観察される意味原理である。

3. 左方移動—上昇変形, 代換(hypallage)  
文/格助詞「を」と「に」の変換

英語には、ある要素を、左に移動する一連の操作がある。これを心的空間、心理的距離という枠組みで捉え直せば、その要素との心理的距離が縮まり、話者の意識、視点の前面に近くなることになる。そのために、対象に及ぶ行為をいわばより「直接的に知覚」することが可能になり、左に移動する操作前の文と比べて〔直接的影響〕、〔行為の達成〕、〔全面(体)〕などの含意が生じる。

一般に或る言語に存在する現象は、顕在的か潜在的かという程度の差こそあれ、他の言語にも観察されることが多い。実際、日本語にも同様な現象が見られる。ただ、英語と比べて語順の自由度が高いために、対象の移動でなく、「を」と「に」という格助詞の交代がその任を担っている。

4. 指示詞「こ、そ、あ」/this, that

容易に予想できるように、日本語の指示詞「こ、そ、あ」の記述に心的空間を軸とする原理は適切な分析モデルであるが、十全な記述のためには、自分空間、相手空間の他に、「談話空間」という擬似空間を加えた複合モデルを設定する必要がある。もとよりここではそこまで立ち入る余裕はないので、今後の分析のための、いわば、お膳立てとして、示唆的な例を観察し、おお

まかな輪郭が浮かび出てくればよしとした。実例の観察は、「こ—this」、「そ、あ—that」という対応関係を示しているが、もう少し観察を進めると、英語では、状況から、対象、相手との物理的距離が自明な時、指示詞の使用は、心理的要因で使い分けられることがある。例えば、(2)は、母親が目の前の犬を指差しながら犬を捨てて来るよう命じた状況での発話である。

(2) (母親) I told you to get rid of  
*that* dog!

(息子) I did!

また、やかましい音や、ひどい臭いも心理的に遠ざけられ *that* が用いられるようである。

(3) a. 「このやかましい音をききな。お  
れがピストルをうったって…」

b. Just listen to *that* noise.

逆に、日本語なら聞き手の範囲だから「それ」で指示するところを、英語では、自分空間のものとして(裏返しに言えば、相手のものではないという主張で) *this* を使うこともある。

(4) a. (棄教した宣教師にむかって)

「あなたはその言葉を言う権利はない」

b. You have no right to speak like  
*this*.

なお、言語習得において、*that* のほうが *this* よりも早く習得されるのに対し、日本語では「こ」の方が「そ、あ」よりも早いという指摘もあるが、ここでは言及するにとどめた。

5. 補文命題が自分空間内にあって、テーマとして、判断の対象となる場合: 補文化子 *that* の出沒/「こと」と「の」  
本章では分析対象をこれまでの「関与者(participant)」いわば「個体」から、「文

命題」に広げ、補文命題が自分空間の内に  
あるか外にあるかに、that の出没、「こ  
と」/「の」の変換が統御されることを例証  
した。

### 第 136 回 1988 年 12 月 7 日

#### 「近代中国におけるアナキズム思想」

坂井洋史

今世紀初頭から三十年代までの中国に於け  
る、アナキズム＝無政府主義思想の受容と発  
展の歴史を、各流派別に概観した。

中国に於て、アナキズムは専制王朝打倒の  
ための思想武器として、西欧から受容された。  
伝統的思想土壌から芽生え、自律的な発展を  
遂げた思想とは異なる、独特な解釈、後年の  
畸形的な発展が生じた原因は、主にここに胚  
胎したといえよう。

清末にはアナキズムを伝統思想の裡に見出  
そうとした“伝統解釈派”(劉師培、何震ら)  
と、西欧の教義に忠実で、単線的な進化論を  
信奉した“欧化派”(吳稚暉、李石曾ら)が二  
大流派であった。更に、アナキズムの論理に  
即して、これに鋭い批判を加えた章炳麟の存  
在も忘れることはできない。中国のアナキズ  
ムは、大筋でこの三者の設定した枠組の中で  
“発展”したといえよう。

伝統解釈派は、後には直接の継承者を失い、  
理論面で陣営の前衛となり得なかったが、常  
に外来思想の中国的咀嚼を前提としていたと  
いう意味で、現実を視野に入れた他の思想と  
の連係、その結果としてのアナキズムの変容  
を思想的に準備したともいえよう。

一方、欧化派の系譜は、陣営の主流を構成  
した。十年代、劉師復らの労働運動派、五四  
時期、黃震霖、区声白らの無政府共産主義、  
二十年代前半、湖南省、広東省、上海のサン

ヂカリストたちは、思想面のみならず、人脈  
の上でもこの一派に属する。彼らの一部は、  
確かに政治主張、理論面での当時の西欧の水  
準に迫ってはいた。しかし、中国の現実から  
の要請に答え得るプログラムを提示すること  
はできなかった。結果、二十年代末には反共  
的性格を突出させて、当時の政治勢力の最右  
派に合流していく者すら現れたのであった。

章炳麟の流れを汲む者には朱謙之という人  
物がいる。彼は二十年代初、徹底的な虚無主  
義者として現れ、章に依拠しつつアナキズム  
の不徹底を批判した。しかし、朱の主張は章  
のような近代批判の視点を欠いたため、上掲  
二者の理論的橋渡し、という貢献はなし得な  
かったのである。

中国のアナキストが、西欧流のアナキズム  
も消化した上で、しかし、中国の現実にも有  
効な方途を摸索し始めるのは、皮肉にもアナ  
キズムの政治的影響力が喪失した二十年代末  
から三十年代にかけてのことだった。運動は  
プラグマティズムの影響を色濃く受けた教育  
救国論者が主体となった。挫折したサンヂカ  
リストや、伝統的な小共同体を来るべき理想  
社会の基本的単位と想定する農村改造論者な  
どもここに合流した。この時に到って、アナ  
キズムは、政治思想というより、上述の“運  
動”を担う禁欲主義者たちを支える、倫理思  
想としての色彩を濃くしたのである。以降、  
アナキズムが中国の現代政治の表舞台に姿を  
現すことはなくなったのであった。

発表は、上記のような粗筋を述べたもので  
あった。それ以後、発表者が公にした論考に  
「近代中国のアナキズム批判～章炳麟と朱謙  
之をめぐる」(《一橋論叢》1989年3月号)  
「五四時期の学生運動断面」(《言語文化》本  
号掲載)があり、各々上記粗筋を補足する性  
格を持っている。参照されたい。

## 第137回 1989年1月25日

## 「カミザール戦争」

佐野泰雄

南仏の町ニーム、そしてその北西に広がる貧しいセヴェンヌ地方。17世紀には新教徒の人口比率が、山間部で90%、ニーム郊外で85%、ニームの街で66%に達する南仏プロテスタンティズムの拠点地帯。が、度重なる弾圧及び、1685年10月の王令により、原則として全員がカトリックへの改宗を宣誓させられる。その後の20年間に、このセヴェンヌ地方及び隣接地域では、カミザール戦争と呼ばれる新教徒の小反乱にいたる一連の事件が起こる。以下に記すのは、若年の予者者たちという共通項を持つこれら一連の事件の概略である。

## 神の啓示

「夜になるとまるで教会堂内であるかのように空に詩篇の歌声が響く。[...]家人どもはみんなそれを一度ならず聞いたし、またこの歌声は我らが地方一帯で聞かれたのであった。」王令公布の二ヶ月後、1685年12月、フランスの南部セヴェンヌ地方のある新教徒の小貴族が記している。教会組織を根こそぎにされ、カトリックへの改宗を暴力的に強制されて悲嘆の淵にあった彼らにとって、こうした現象は神が未だ彼らを見捨てていないこと、彼らの解放が近いことを示すものとして受け取られる。オランダに亡命していたフランス新教徒の代表的牧師ジュリユはこれに呼応するかのようになり、1686年3月、『予言の成就』を著してフランスプロテスタンティズムは1689年に解放されることを聖書に基づき予言し、この地方の新教徒たちをいわば黙示録的興奮の中に置くことになる。勿論この予

言は外れるのだが、こうした雰囲気は、以後20年ほどこの地方の先鋭なプロテスタントの活動の特徴となる。

## 宗教が文化を包括していた

では自己の宗教へのかくもの固着はなにゆえか。この問いには歴史家、ル・ロワ・ラデュリが一応の答えを与えてくれる。このセヴェンヌ地方へのプロテスタンティズムの定着はこの土地を古来よりのフォークロアを完全に消滅させた。そのかわりに民衆文化の位置を占めたのは、聖書が物語る説話であり、子守歌として聴いたクレマン・マロ、テオドル・ド・ペーズの賛美歌であり、定期的に行なわれる牧師の説教であった。従って彼らからその宗教を奪うことはその文化を根こそぎ奪うことを意味したのである。にもかかわらず彼らは弾圧に屈して、表面的にはあれカトリックに改宗してしまった。神経症的な反応、ひいては集団ヒステリーは、彼らの不安、苦悩がどれほどのものであったかを示している。

## 奪われた物の代替

説教を聴きに集まるということ。これは彼らの霊的、文化的紐帯を（のみならず、おそらく経済的紐帯をも）彼ら自身に確認するものであったのだろうが、上記王令により、牧師は改宗または追放、説教は全面的に禁止になってしまった。上で紹介した、夜空に響きわたる賛美歌の逸話は、王令発布から強制改宗直後の彼らの絶望をむしろ象徴している。だが彼らは一時的な茫然自失の後、非合法の礼拝を組織し始める。その中心になったのは、平信徒の中でいくらかは教育のあるもの、例えば教会学校の元教師、元聖歌隊員などである。彼らがかつて聴いた牧師の模倣、あるいは亡命した牧師の書簡による指示にしたがっ

て説教を行なった。1686年春頃にはこのような説教師が5名ほど出現、セヴェンヌ地方の新教徒は彼らが巡回して来るたびにそのまわりに集って、奪われた宗教活動を（あるいは文化活動を）僅かながら取り戻すのである。秘密の礼拝を主催する巡回説教師の数は、王権によって根絶させられる1700年には60人以上にのぼったのであった。

### ドーフィネの神憑り少女

フランス東部から南へ流れて、地中海にそそぐローヌ河。グルノーブルを中心とするドーフィネ地方はこの大河を隔ててセヴェンヌの反対側、つまり東側にある、やはり新教徒の人口密度が高い地域である。1688年2月、15歳の羊飼いの少女イザボーが連日就寝中に語り続けていた。最初は単なる寝言だと思っていた人々は、彼女の言葉の内容に驚かされる。まず彼女はフランス語で語る。南仏の人々の母語はオック語であり、彼女たちドーフィネ地方の民衆の母語はしたがってオック語の一方言。北仏の言葉であるフランス語は彼女は喋れない。ただ牧師たちがフランス語で行なう説教を聞いていたに過ぎない。次に彼女は賛美歌をいくつか歌う。更に聖書の数節を朗唱し、これを素材にプロテスタント教会の現況を解釈する。また時には神学論争の問題をも明晰に分析することがあった。文盲の15歳の羊飼いがである。おまけに覚醒後の彼女は元の単なる羊飼いの少女に戻ってしまう。人々はこれを神の奇跡だと受取り、彼女の言葉を聴くためにあちこちから信徒が集まる。イザボーの言葉はまるで牧師のそれであるから、集まりは当然礼拝の様相を帯びることになる。

ローヌ河の彼岸、セヴェンヌ地方では上で述べたように巡回説教師たちが非法法裡に礼拝を組織して歩いたが、ドーフィネではそれ

に相当するものがこれまで無かった。しかしようやくドーフィネの新教徒も奪われた礼拝の代替物を見いだす。イザボーに影響されて何人もの「靈感に打たれた予言者」が出現、この地方を巡って集會を主宰し始めたからである。彼らは同様に皆若く、慎ましい階層の出であった。彼らがフランス語で語る予言の主眼が、悔い改めを説くこと、特にプロテスタントの大義を捨て強制的改宗に屈した親たちの世代に悔悛を迫るものであったことにおいても共通している。

### 予言の熱気はローヌ河を越える

瞬く間にドーフィネ地方に広まった予言者熱はローヌ河を越え、まずセヴェンヌに隣接するヴィヴァレ地方に伝播する。1689年初めのことである。この地の新教徒も魂の慰めに飢えていたのであろう、若き予言者が続出、非合法の集會があちこちで行なわれるようになる。中心となる予言者のみならず、参加者の熱狂には激しいものがあり、軍隊に包囲され、解散の勧告を受けているにもかかわらず、精霊に保護されていると信じて命令を拒否し、参加者全員、3~400が殺された例もあるほどだ（1689年2月）。この事件及びいくつかの同種の事件を経て、大きな集會が組織されることはなくなり、予言者たちを囲む集いが家庭内で近隣の寄り合いとして、あるいは孤立した小集落で小規模に行なわれるようになる。

### 予言者熱は集會で伝染する

さてではどの様にして予言者は誕生するのか。幾人かの予言者が証言を残しているが、そのうちから一例を引こう。新教徒たちの集會に出かけたある少年が、「神の息吹を浴びた」なんん人かの「予言者」がその場で体を痙攣させて憑依状態にいたり、神の言葉を伝え

るのを目にし、衝撃を受ける。その後自宅にいるとき突然の体の震えとともに胸苦しさを覚える。こうした発作が程度を増しながら、二三週間続く。ある日強い体の硬直と痙攣があり、ついに神の言葉が彼の口をついて出る。彼自身の意識はしかし常に目覚めていて、自分の口から神の言葉が止めどなく流れ出すのを感じ、自分が神の道具と化したことを喜んでいる。

### セヴェンヌへの伝播

上でも述べたようにセヴェンヌでは巡回説教師たちが牧師の役割を果たしていたのだが、1700年頃までにすべて処刑、もしくは追放されてしまう。こうして精神的空白状態に置かれたこの地方に、隣接するヴィヴァレから予言者熱が伝わるや、たちまちセヴェンヌ全域に広がる。新教徒たちの興奮に比例して、彼らの行動は大胆であり、当局側の弾圧もそれについて激しくなる。その結果、若い「予言者たち」が、禁止されている礼拝の主宰者として処刑されることが多くなった。1701年から1702年の春にかけてのことである。

### 復讐から反乱へ

神の選良中の選良である予言者が殺戮されたのであるから、神は復讐を望んでいらっしやる。神の民はその腕となり、神の敵を屠らねばならぬ。こうした新教徒の気運に呼応して、1702年の初夏、セヴェンヌの「予言者」の中には、神から復讐の命令を受け取るものが出て来る。1702年7月ついにある予言者の、きわめて具体的な襲撃計画を内容とする予言に導かれて、武装した数十名の新教徒がセヴェンヌ山中の監獄を襲い、弾圧の元締めであったカトリック聖職者を殺害、囚人を解放するにいたる。この事件は、それまで常に受け身であった新教徒たちが攻勢にでる転機

となったのであり、ここにカミザール戦争が始まる（カミザールとは反乱に加わった新教徒の通称である）。この反乱の経過は省略するが、最大時で総勢1500-2000人の農民職工が、バリから派遣された25000の正規軍を相手にゲリラ戦法によって善戦し、総指令官を二人更迭させた。このことは、戦争は貴族を初めとする専門家の専有物だと思っていた当時の人々の耳目を大いに驚かせると同時に、カミザールたちの首領、もとパン屋の徒弟カヴァリエやもと羊飼ロランの軍事的才能を有名にしたのである。

カミザールの乱の大きな特徴は、カヴァリエを初めとして首領格の多くが「神から予言の才能を授けられており、」具体的な戦術の案出に際して、予言が直接の指針となっていたことである。またスパイの摘発もしばしば予言者の予言がきっかけとなった。1702年から1704年にかけてのことである。

### 内紛から終息へ

カミザールたちは新教徒住民の援護を得てよく戦っていたが、膨大な数の正規軍を相手の苦しい戦いであることに変わりなく、時に大きな打撃を被ることもあった。カヴァリエは独断で王権と交渉を決意、1704年5月、国王軍総司令官及び地方長官とニームで会見を持つ。無条件降伏をするかわり反乱者の国外亡命という条件を持ち帰ったカヴァリエはカミザールたちの大部分から離反され、6月セヴェンヌを去る。もう一人の首領ロラン等のもとで彼らは戦いを続行するが、そのロランも8月に戦死、10月には主だったものの大部分が降伏して外国に亡命し、反乱は一挙に衰退へと向かう。

以後、小規模の蜂起や、新教諸国の部分的な介入があるが、1710年最後の戦闘的な指導者の処刑によってカミザール戦争は終わり

を告げるのである。

### 荒野からの声

16世紀の宗教戦争や17世紀の新教徒の反乱が、おおむね貴族の主導で行なわれたのに対して、18世紀初頭のカミザールの乱は新教徒民衆の内部から発したものであった。それは自己の文化否定と同義である、他の宗教の押し付けを拒否するための、反射的身振りとも言える。この点で評者の見解は一致しているが、ただこの他の要素としてアンシャン・レジーム期の農民一揆の特徴である反税闘争をカミザールの反乱にも認めるかどうか、意見の分かれるところである(例えば Le Roy Ladurie 対 Joutard)。

ちなみにカミザールの反乱に先立つ予言者の発生を世代論的に見ると興味深い。1685年の王令発布時、フランス国内の新教徒は少なくとも表面的には改宗を受け入れたのであるが、この親の世代の行為が、子の世代に取って「背信」であり「恥」と見えたのは想像に難くない。上でも少し触れたように、「若き」予言者がその予言の中で、特にこれに言及したことからも理解できる。逆の見方をすれば、親の世代が与えたこの精神的外傷と、王令発布後の文化的無風状態とが、ただでさえヒステリーへと傾斜しやすい青少年たちの間に「予言者」を生んだとも言えよう。カミザールの乱の時期を含めて、親たちが子の世代に属する予言者に全面的な支持を与えたことは、こうしたエディプス的心理関係の中での「ひけめ」故ではなからうか。

さて、若き予言者の神憑り状態の伝染は、現代の語彙を用いると、集団ヒステリーということになる。新教徒の置かれた特殊な状況に、若年者の不安定な精神および性的抑圧という要素が加わって集団ヒステリーが引き起こされたというのが、平均値的な説明であ

る。上でも例に出したように、神の言葉が次から次へと自分の「口腔」について出て来るのが快い、といったような証言はフロイトの精神分析の格好の対象となろうし、また、事実大部分の予言者は配偶者を持つと同時に予言の能力を失うのである。

ところで上に述べたような予言者を中心とする礼拝のありようが、全プロテスタントの承認を受けていたわけでは勿論ない。例えば都市部の上層市民たちや、オランダやイギリスの亡命フランス新教徒の知識層の中ではむしろ「予言」に対する懐疑冷笑の方が一般的であった。確かに、教養のある正規の牧師が行なう、古典的修辞に則った説教に比べれば、予言者の「予言」は悔悛の勧告など二三の固定的論点を飽くことなく繰り返すもので、ひどく見劣りする貧弱なものであったろう。しかし彼らの「予言」がまさに飽くことなく繰り返すことこそ、この時期のこの地域の新教徒たちが切実に必要とした「神の言葉」だったはずである。

「予言」は、だから1685年から1710年にかけてフランスの南東部のプロテスタントたちが展開した一連の運動が持つエネルギーの具体的表現と言える。この運動の空間的場、時間的場を離れると「予言」は無効になってしまう。カミザールの乱の終息後、主だった二三の者が自分たちの礼拝のあり様を「伝道」するために西欧各地を回るが、激しい反発をかうのが殆どであったし、また、カミザールたちのかつての指導者カヴァリエでさえも、後年回想録を著したとき、自分が予言者であったことのみならず、カミザールたちが一群の予言者に導かれていたことすら隠蔽してしまうのである。反乱の末期、あるカミザールは「いまではもう、われわれを導く神の言葉が聞こえなくなった」と慨嘆しているが、運動のエネルギーが萎んでいくにつれて「予言

を受け取る感受性」も弱まっていったことを如実に表わしている。

以後南仏のプロテスタンティズムはアントワーン・クルらの指導のもと、非合法裡にはあるが伝統的な教会組織、礼拝へと立ち戻ることになる。先ほどの世代論へ繋げて言うと、「予言者」の次の世代が前の世代との絆を断ち切り、教会の再編成を担うことになるのである。しかし、再編成された教会の最初の牧師たちのうちに、かつて文盲であったカミザールの残党が教育を受けて加わっていたことも付言しておく必要があろう。

1685年の王令発布以降、非合法裡に集会を行なう新教徒たちは、それを申命記第八章の記述になぞらえて「荒野の教会」と呼んだ。何がそれほど彼らを自己の宗教＝文化に固着させたのか。精神的価値が拡散してしまった、言い換えるならば希薄になってしまった現代を生きるわれわれは、それに正確に答える術を持たない。だが、というよりはむしろそれ故に、「荒野」の彼らの姿はまるでいつか見た夢のように遠くで輝いているように思える。

第138回 1989年2月22日

中国の文字改革における当面の課題

李行健・折敷瀬興

日中両国は現在も尚、それぞれに漢字を使用している関係から、中国における文字改革が日本の学者から関心を払われて来たのは、誠に当然なことであった。

毛沢東はかつて五十年代に、「文字はかならず改革し、世界共通の文字である表音化の方向へむかわなければならない。」と提起した。ここ数十年來、中国の文字改革は、毛沢東のこの提起を指導方針として来たが、「文

革」収束後、中国は経済建設を中心に据える政策に転じ、各方面での大調整が行われ、それに随って文字改革の仕事も大きく転換した。

一九八六年一月、中国では「全国語言文字工作會議」が開催され、新たに中国における今後の言語文字関係の仕事の方針と任務が確立された。言語文字関係の仕事が経済建設のために充分貢献できるように、ピンイン化（表音化）の方向に関する問題はもはや提起せず、規範化に重点を置くことが決定された。文字改革の作業は緩やかに継続的に進めて行かなければならない。今後の文字改革の仕事が「百家争鳴」であるのは当然であり、継続的に深く研究して行かねばならない。過去百年を振り返って見ると、中国における文字改革の社会的背景と歴史的発展の状況は、日本の場合とほぼ一致しているが、日本における文字改革の運動の勃興は中国より二十年程早いので、中国における文字改革の先駆者の中には、日本における文字改革に思想的な啓発を受けてこの仕事に身を投じた人たちがいる。日中両国の文字改革の先駆者たちは、漢字は複雑なので、ヨーロッパの先進国に追いつくためには学び易く書き易い表音文字を採用しなくてはならないと考える点で一致していた。しかし、この複雑な仕事をあまりにも簡単に見なしていたという点でも一致していた。日本の学者がすでに主要な努力を漢字使用における規範化の推進に置き、漢字使用の撤廃を意図しなかった時に、中国はピンイン化（表音化）を国策として推進して行ったのである。ただ、事実が証明するように、それは実際、容易ならざる仕事であるうえに、当面、改革の条件を全く備えていないのであった。

漢字を改革しなければならないという考えは、過去に文字改革を唱導した人々が、漢字は複雑であり、甚だ欠点が多く、少しも長所がないとしたため生れた。しかし、漢字の長

所については、往々見てはいても気づかずにいたのである。科学の進歩と認識の変化に伴い、現在では皆、漢字には多くの長所があると考え、点で一致している。たとえば、漢字は中国語に適合している点である。「形」、「音」、「義」が三つが結合しておりその情報量は多く、時空を越えた働き等を具有しているのである。同時に、漢字はたとえばコンピューター処理等のような近代化の要求にも適合できるのである。従って、新たに漢字の性質、機能と長所、短所を理解することこそ、今後、いかに文字を改革して行くかという問題の核心となろう。これらの問題に対して、中国では活発な議論が進行中である。

中国では、さしあたって将来に解決を予定されているピンイン化（表音化）の方向に言語文字関係の仕事に従事している人々の精力を注ぐよりも、言語文字の規範化と標準化の上に力を注いだ方が良いと見なされるようになった。この規範化と標準化はまた故周恩来首相の一貫した見解でもあった。従って、中国における新時代の言語文字の仕事の方針と任務は新たに以下のごとく定められた。すなわち、「現代漢語の規範化の作業として、積極的に普通話を普及させること、現行の漢字を整理研究し標準化すること、更に一歩進めて“漢語ピンイン方案”を推進し、現実に使

用して生ずる際の問題を研究解決すること、漢字の情報処理の問題を研究し、それに伴う成果の判定に関与すること、言語文字の基礎研究と応用研究を強化して、社会の諸問題に対応すること」である。ここでは明らかに、ピンイン化（表音化）の問題を提起していないばかりか、漢字の簡略化の作業も一つの専門の任務と見なされていない。それは、文字の安定性と規範性を維持するためには、短い期間内に再度、漢字を簡略化することは好ましくないからである。新しい方針と任務に照らして、中国における当面の文字改革の仕事は以下の方面に焦点が置かれている。

- 一、現代中国語の常用字と通用字表を制定すること。
- 二、使用上における漢字の各種の規範を漸次、確立して行くこと。
- 三、一歩進めて、『漢語ピンイン方案』を推進し完成すること。
- 四、漢字の情報処理のために必要な規準を制定し、実際上の問題を研究解決することに資すること。

日中両国の学者が漢字（問題）に対して存分に研究を掘り下げ、交流を推進することを希望し、漢字が引き続いて日中両国のために更に貢献することを願うものである。